

- ◆2024年9月25日発行ラインナップ◆
  - ・お詫び「ムチンの誤情報に関して」
  - ・米価とエンゲル係数
  - ・日本の農業・農村の大切さを知る

## お詫び「ムチンの誤情報に関して」

MJ665号の里芋の記載におきまして、水溶性食物繊維「ムチン」を含有するとの記載をいたしましたが、「ムチン」は植物に存在しないので誤記載とのご指摘があり、誤った記載であったことを確認いたしました。誤った記載をいたしましたことを深くお詫び申し上げます。誠に申し訳ございません。また、誤りをご指摘いただきました読者の方には感謝申し上げます。ありがとうございました。

## ~米価とエンゲル係数~

エンゲル係数(食糧費÷消費支出)は豊かさを示す指標となっている。エンゲル係数が低くなるほど生活は豊かだと学校で教えられた係数であるが、2023年4月から2024年3月(2023年度)の我が国のエンゲル係数は2000年以降最高の29.8%(総務省)となった。

海外に依存している穀物やカカオ、コーヒー、 果汁、などの市況高騰と為替が影響している と考えられる興味深いデーターがあった。第 一生命経済研究所の熊野氏が独自に試算した ところ、10年間の食料品の実質消費の変化 は主食用調理品が最も大きく増え、コーヒー・ ココア・他の飲料と続く(図参照)。一方、 魚介類、米、果実は激減している。食事の中 食化や肉食化が進んでいる一方、日本食の素 材である魚介類や乾物・海藻が減っており食



<総務省「家計調査」から第一生命経済研究所 熊野氏が試算>

事の内容が大きく変わってきていることを示している。但し主食用調理品にはお弁当やおにぎりの御飯も含まれているので米の実質消費の減少幅は抑えられていると考えられている。食生活の変化や調理の手間を省く商品開発、少世帯化、コンビニ等の食品の多様化など色々な要因で消費志向が日々変化しており気付かなかったことを、エンゲル係数29.8%によって食やそれに関わる農林水産業の大きな変化に気付かされた。

「物価の優等生」であった卵は飼料高騰で既に値上がりしており、更に2024年度はこの夏に精米やパック御飯の品薄と価格高騰がひき起こされ、エンゲル係数上昇に拍車をかけることになると考えられる。 今回の米価の値上げは消費者にとっては懐に痛い話ではあるが、米の生産者には来春の生産意欲を高めて欲しい。

9月10日の日本農業新聞に掲載された一文を紹介する。

「24年産米の概算金について「再生産でき、持続的な稲作に取り組める水準を目指した。」と口をそろえる、加熱する24年産の集荷競争も概算金を上げた背景にある。」とある。確かに23年産米の品質は高温等の生育環境悪化により例年よりは良くなかったけれど、23年産米の価格は再生産できない価格であったのかと・・・。日本の主食を支える米の価格はどうあるべきか?需要と供給のバランスだけで価格が決まるということで良いのか?主食である米の価格は生産者が再生産可能かという視点も必要だと思う。また米に対する消費者の消費行動は他の農産物と違うことが「令和の米騒動」で再認識されたのではないか。

「持続可能な社会」という言葉がよく使われるようになったが、その根幹には「飢え」を防ぎ「環境」を 守る「持続可能な農林水産業」があるべきではないだろうか。そして「農業」を支える我々「肥料業界」も 再生産が維持できずにメーカーの生産縮小やラインの停止、肥料商の廃業など後戻りできないことが起こり 始めている。元気な肥料業界が復活し農業を元気にすることを目指したい。

## ~日本の農業・農村の大切さを知る~

七島藺って作物を聞いたことはあるでしょうか?国内では大分県の国東半島で唯一栽培されているカヤツリ グサ科の植物で畳表の材料になることが多く七島藺(しちとうい)と読みます。畳表については2023年3月8 日発行の当刊で畳の豆知識として熊本県「いぐさ」を紹介しました。実は七島藺も畳表としての歴史は古く36 0年以上にわたって日本人の暮らしに根付いており、いぐさで作った畳表と比べ強度が5~6倍と丈夫であるこ とから1964年の東京オリンピックでは日本武道館の柔道会場の競技用畳として採用されたほどです。

しかし栽培のしやすさや作業の機械化が進んだいぐさの普及により、手間のかかる七島藺の栽培は途絶えか けたこともありましたが、ここ数年で日本文化の一つとして改めて希少性と価値が見直されてきました。この 優れた特性を持つ七島藺を絶やしてはならないと七島藺振興会や工芸品店の活動が実り平成28年地理的表示保 護制度(G1)に「くにさき七島藺表 | として登録されました。以降は七島藺で加工された工芸品は生産が追い 付かず現在では数ヶ月待ちの工芸品もある状態。最近では七島藺で編み込んだミサンガがJリーグクラブの大 分トリニータの公式グッズ「くにさき美山河(ミサンガ)」として販売されるぐらい人気ブランドになりまし た。

話変わって大分市には全国でも珍しい大分県椎茸農業協同組合があ ります。実はこの椎茸組合は1907年(明治40年)に重要物産同業法 に基づき組合組織として発足。その後戦後の統制時代の困難を乗り切 り1948年(昭和28年)に新たに施行された農業協同組合法から現在 に至るとても歴史のある組織です。またこの組合事務所の敷地内には 椎茸神社が祀られていて、この地域の人々のしいたけにたいする思い が感じられます。

しいたけ栽培に欠かせないのが菌付けの原木として使用するクヌギ です。クヌギが盛んに里山へ植林されてきたことで大分県は国内トッ プクラスのクヌギ林栽培面積を誇り、その原木で栽培されるしいたけ は現在では大分ブランドとして全国で高い評価を得ています。

さてこの原木となるクヌギですが伐採しても切り株から萌芽して再生 する為、森林資源が循環するという優れた特性を持っています。クヌ ギの木を知らない人は多いと思いますが、クヌギは秋になるとモジャ モジャ帽子をかぶった丸いどんぐりを実らせます。話は戻りその萌芽



椎茸農協構内にある「椎茸神社」

したクヌギは適正な管理を得て約15年後には原木しいたけ栽培に適したサイズになり、このサイクルを続けて います。国東半島で原木しいたけ栽培が伝統的に行われてきた背景に降雨量が少ない上に雨水が浸透しやすい 火山性の土壌であったことが関係します。かつてこの地域の人々は足りない水と戦いながら自然の地形を活か した農業を行ってきました。その歴史から山麓一帯にはクヌギ林が適切に管理され、クヌギは原木しいたけ栽 培を行うためだけではなく、クヌギ林の伐採と再生を繰り返すことで森林の新陳代謝を促し、そこで涵養され た水資源が水田農業や多様な生態系を育み、農業が持つ多面的機能の維持が図られていったのです。この森林 を循環利用しながら食料を生み出すシステムを世界に発信したことがきっかけで大分県国東半島・宇佐地域は 「クヌギ林とため池がつなぐ国東半島・宇佐の農林水産循環」として世界農業遺産に認定されています。

この様に日本の農業・農村は「我々の食」を支えているだけでなく、国土の保全、水源の涵養、自然環境の 保全、良好な景観の形成、そして文化の伝承など様々な働きを持っています。今回紹介した七島藺や原木しい たけを例に地域に根ざした高品質な農産物のブランド化を図り、様々な取組で農業再生モデル地域が此れから も多く誕生することを願ってやみません。 (福岡支店)

しいたけの素焼きに醤油を少しつけて食べると美味しいですよね。BBQで欠かせません。

編集事務局:田口、山内 URL http://www.mcagri.jp

電話:03-5275-5511/E-mail:macjournal@mcagri.co.jp